千変万化クリスちゃん

沖田不二乃

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後輩から勧められたうたずきんがきっかけでサブカルにハマった雪音クリス。アニメやゲームが心象に影響してイチイバルに変化が…？

クリスちゃんのギアが色々変化するお話です。

後々疑似クロスになるかもです、苦手な方はご注意。

６／２追記：実質的なクロスによる為タグの変更

目　次

ガンダム・イチイバル編
きっかけ ―― 1
始まりのバックル ―― 8
ケース1：ガンダム・イチイバル【前編】 ―― 15
ケース1：ガンダム・イチイバル【後編】 ―― 22
番外編：〝それでも〟と〝だとしても〟 ―― 30
揺らぎの街のクリス編
ケース2：揺らぎの街のクリス ―― 42
秩序と鞘と撃槍と ―― 48
風鳴る独奏は完成へ ―― 57

ガンダム・イチイバル編
きっかけ

ある日の事だ。

学校の授業が終わり、放課後になって、

（さぁーってと、本部で身体動かしてから帰るか…）

と思っていたら声を掛けられる。

「あっ！先輩、今帰りですか？」

「よぉ。まぁそんなとこだな。」

立花（バカ）響のツレ、あたしの後輩である板場弓美だ。偶然帰りが一緒だったようで、声を掛けられた。

コイツぁ普段あと二人と一緒にいるイメージだったからちょっと珍しく、あの二人の事でも聞こうかと思ったら唐突にこんなことを言われた。

「先輩！今度の休みの日、先輩の家に遊びに行って良いですか！」

まぁ、あたしとしては別に次の休みに特に予定は入れてなかったんだ。それに後輩からそんなことを聞かれたら少しばかり恥ずかしいが満更じゃあなかった。だから…聞いちまったんだ。

「毎度のことながら藪から棒ナンだよ…まぁいいけどよ、あたしの家に来ても大したモンねぇぞ？なにすんだ？」

「いーんですよ！ちょっと借りてきたＤＶＤがあるんで、先輩と一緒にふｋｙ…観たいなってッ！是非一緒に観ましょうッ！いや、絶対観させますッ！」

「お、おう…じ、じゃあとりあえず、次の休みが…」

休みの日を伝えてその日は別れた。

「アイツ、あんなんだったか…？一体ナニをあたしに観させようとしてんだよ…」

後輩の気迫に押されるたぁ思わなかったぞ…やけに嫌な予感がするが、今更バックレる訳にもいかねぇしな…

そして当日。

その嫌な予感は当たっちまったんだ…

「お邪魔しまーす！」

昼頃。ＤＶＤを観ると言っていたから、見終わる頃にはメシ時になるだろ、と思ったから予定は昼ぐらいにした。

…思ってたんだよ、ホントにな。

「おーっｓ……おい、おまっ…んだよ!?その量!?」

「あ、これですか?すいません、あたしはアニメを観るならまとめて借りちゃう主義でして…」

そう、あろうことかコイツぁとんでもねぇ量のＤＶＤをこの残暑でうだるような昼間っから引っ提げてきた…!

しかも、だ。

「なぁ…それってまさか…」

「はい!今回観るのは【快傑☆うたずきん!】です!」

そう、あたしが所属してるＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．が、一般人の目撃したあたし達の情報を隠蔽しきれずに都市伝説、噂として広まった。

それを少女漫画として出版し、コレが大ウケした。

そして、日曜日の朝の子供向け番組として世に解き放ったのがコレだ

名前だけは知ってんだけどよ…

「なんで子供向けのＤＶＤナンだよッ!?もっとフツーなのを観ると思ってたぞ!?」

実は薄々感じてたんだよ、あたしは…

まぁコイツの事だからＤＶＤっってもアニメかなんかだろうなって。まさか子ども向けのアニメなんざ観る事になるたぁ思わなかったぞ…

「失敬な!子供向けアニメだって実は凄い見所があることが多いんですよ!?」

「んな見所あんのか!?どう見たってコレ…」

「あーもう!百聞は一見になんちゃらです!折角のうたずきんに失礼じゃないですかッ!とりあえず観ましょうッ!」

そういってコイツは早速ＤＶＤをあたしの家のＤＶＤプレーヤーにシュートした。

仕方がねぇ、後輩が誘ってくれたんだ、無下にするわけにはいかねぇしな…とりあえず観てみるか…

数時間後。

「おいッ!うたずきん!涙が無い世界に世界にしてぇならなんでオマエが泣いてるんだよ…!畜生ッ!ぜってェあたしが救ってやるッ!」

「(あ、あはは…先輩、さっきからアニメみたいなセリフ言いながらうたずきんに夢中で観てる…)」

すまねぇうたずきん…あたしがもっと強かったらおまえはもう泣かなくて良かったのに…

結論から言うと、ハマった。

放課後のチャイムが鳴り響くと同時に弾丸ダッシュで家へ駆ける、今日は録画してたやつをいち早く観るためだッ!

あの後、うたずきんに夢中になっていたあたしを見たアニ女(メ)が何本かアニメを勧めて帰ったんだ。それを期にあたしは色んなアニメ、漫画、ラノベ、ゲーム…サブカルにどっぷり浸かり…

任務が何もない日や放課後、訓練後に録画したアニメを消化しながらメシを食ってネットを見ながらゲームするのが最早日常になった…

そんなある日の放課後。

学校が終わったら今日は訓練の日だ、録画するアニメがねぇ日くらいはやんねぇと…訓練の回数も減ってきてるからな…

と思っていたら。

「クリスちゃーん!」

あの立花(バカ)響があたしのクラスまでやって来た。

「おいバカ、学校じゃあたしが先輩だから【ちゃん】はやめろっつってるだろ!?」

「だってぇ～、クリスちゃんはクリスちゃんだし仕方無いよ～」

「はぁ…ったく、馬鹿なこと言ってねーで行くぞ」

「うん、行こっか。今日は師匠も久しぶりに身体でも動かすか、って言ってたから頑張ろうねッ!」

「げぇ…今日の訓練相手、おっさんかよ…」

今日の訓練は、S．O．N．G．の司令である風鳴弦十郎（おっさん）が相手らしい。あのおっさん、マジでバカみてーに強ぇんだよ…なんでギアを纏ってるあたしら6人がかりで生身の人間が捌けるんだよ…

今日の夜はグッスリ爆睡コースが確定したことにゲンナリしながら本部に着いた。

「おう、響君、クリス君。学校、お疲れ様」

「師匠！こんにちはッ！今日もよろしくお願いしますッ！」

「…なぁ、おっさん。マジで今日の訓練の相手、アンタなのか？」

「あぁ。俺もたまには身体を動かさんと、鈍っちまうからな。今日は気合を入れて訓練するぞお前等ッ！」

わずかな希望も砕け飛び散った欠片になってバラバラになったあたしと、ヤル気満々なバカがトレーニングルームで訓練の準備をする。

「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ…」

「Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ…」

あたし達は聖詠を歌ってその身にギアを纏う。

「よし、それじゃあ早速ブッパなして…」

「クリスちゃん（君）!?どうしたの（んだ）それ（は）!?」

開幕からブッパなそうとした途端、二人が声を揃えて言う。

特に、おっさんに関しては少しばかり面白れぇくらい唖然とした顔をしてるときたもんだ。

「…あん？いきなりどうしたんだァ？」

「…クリス君、今の自分の姿に、何か違和感を感じなかったか？」

「違和…感…？」

「だって…それって…」

言われてから違和感に気付く。良く見りゃ腕や脚のギアのパーツに既視感があったからだ…おい、まさかコイツァ…

「うたずきん…だとぉッ!?」

つづくッ！…のか？

始まりのバックル

～前回のあらすじ～

アニメちゃんこと板場弓美と観たうたずきんがきっかけでサブカルにどっぷりハマったクリス。

訓練でギアを纏ったらクリス自身がうたずきんになって…

クリス、そんなことになるまでうたずきんにハマったんだ…響と今度一緒に観てみようかな？

「うたずきん…だとぉッ!?」

どうみてもうたずきんのそれにしか見えないギアに驚いた。

「一体どうなってやがる…!?」

「どう、って言われても…」

「恐らくは、心象の影響によるギアの変化と見ていいでしょう」

トレーニングルームからエルフナインの通信が入る。

「あぁ。過去に映画や小説等を参考にしてギアを変化させる事例はあっただろう。…最も、ここまでモチーフに近い変化が起こることはなかったはずだが…」

エルフナインとおっさんの説明を受けて納得した。確かにギャラルホルン絡みの件がメインだがギアの変化は何度かはあった。

本来、シンフォギアっつーのは聖遺物の欠片を歌で起動して纏うんだが、纏うギアのフォルムってのは起動した奴の心象に影響されて変化するんだ。あたしのイチイバルは本来は弓だが重火器になってる

のもそれだ。
　ってことはだ。コレの原因、もう心当たりしかねぇ…
「クリスちゃん…」
「…あぁ。コレは…」
「可愛いッ！可愛さが爆発しすぎてるよッ！」
「わかる…このギアは良いぞ…」
　どうでもよかった。
　あたしは今うたずきんになっている。その事実を噛み締めていた…
「…あー、その、今日の訓練は中止にｓ」
「いや、やんぞおっさん。今ここで異常がねーか確かめた方が良いだろッ！」
「そうですよ師匠ッ！クリスちゃんの姿だけじゃどこまで変わってるか分からないんです、やりましょう訓練ッ！」
「そ、そうか…なら訓練を始めるが…無理は禁物だ、いいな？」
「言われなくてもそのつもりだッ！」
「行きますよ師匠！」
（推奨ＢＧＭ：とどけＨａｐｐｙ♥うたずきん！）
【ＲＥＤ　ＴＲＩＧＧＥＲ　ＨＡＰＰＹ】
　開口一番にあたしはおっさんに銃撃をブッパなす。
　だが、弾幕の間をさも当然のようにすり抜け接近してくる。

相変わらず生身の人間がやる芸当じゃあねーが…想定済みだ。

「せぇりゃあああああーーーッ！」

あたしの股下をトンネルみてーに潜り抜けて、バカがおっさんに向かってパイルバンカーの型を構えながら突撃する。

「ぬぅんッ！破ッ！」

「はぁッ！…どこッ!?」

おっさんが地面を脚で割り、壁を作る。直後にバカの拳で粉々になるが砂煙で姿が見えねえ…なら！

「ズッキズキ・ピカッとフォームだッ！」

【ＨＡＰＰＹ　ＳＵＮＳＨＩＮＥ　ＢＵＬＬＥＴ】

煙の上に向け炸裂する閃光弾をリリカルマイク型の武器から放つ。

「安易に煙の中を確認するんじゃないッ！敵にこちらの位置を知らせてるような…もんだッ！」

おっさんが飛び上がって閃光弾をキャッチアンドあたしへリリース…っちょ、おい…そいつぁ…聞いてねえぞ!?

あたしは投げつけられた炸裂する閃光弾で視界が封じられて…

「空中なら…いっけえええええッ！」

辛うじて防げたらしいバカが追撃するが…

「良い洞察力だ、だが空中に居る相手が無防備という道理はないぞッ！」

「うそォッ!?…ぶへぇっ!?」

空中戦も出来るらしいおっさんが迎撃してバカが叩きつけられた。
ようやく視界がマシになってきたと思ったら、おっさんが既に背後に居た。
「今日の訓練はこれで終了だ」
と、首筋に手刀を当てられあたしはグッスリ爆睡コースからさくっと気絶コースにシフトチェンジを余儀なくされた…

気絶したあたしはメディカルルームに直送されてそんままチェックを受けていた。
チェックが終わった頃に目が覚めた…あーあ、またいつも通りじゃねえかコレ。
基本、おっさんが相手の訓練はメディカルルームが恋人レベルで必ずお世話になる。それぐらいハードなんだよおっさんの訓練…
「クリスさん、お疲れ様です。チェックが終わって異常も見られなかったのでもう大丈夫です」
「おう、いつもすまねぇな、エルフナイン」

チェックを終えたエルフナインが部屋に入ってくる。
S・O・N・G・には欠かせない技術者のメンバーであるので、ギアの調整やメディカルチェック、他の業務等で忙しいハズだが…
それでもあたし達の身をいつも案じてくれてる、かけがえのない仲間の一人だ。
…たまには休んだほうがイイんじゃねーの？って思うことが多々あるんだがよ…
「いえ、コレがボクの出来ることなのでこれくらいは…」

「ったく、労いの言葉ぐれぇ素直に受け取っとけって。まだやることあんだろ？」
そう言いながらあたしはエルフナインの頭をぽんぽんと撫でてやる。…もふもふしてんな、コイツの髪。
「わわっ…あ、ありがとうございます…今はチェックを終えたので一通りの仕事は落ち着いてるので…
それより、クリスさん。少し見てもらいたいものがあるんですが…」
そう言ってエルフナインは資料をあたしに渡してきた。
そこに書いているのは今回の訓練の内容についての事だった。
「…あん？これ、今回の訓練のやつじゃねーか」
「はい。コレについて少しお話をさせてもらいたいんですが…」
「あー、コレな。心当たりはあんだよ…っつーか、それしかねーんだろうがな」
エルフナインにあたしのイチイバルが変化した経緯について、
あたしはその原点であるうたずきんが影響している事まで話した。
「…なるほど。実は、あのギアを纏っていた時のクリスさんのフォニックゲインの質がいつもと違っていたんです」
「フォニックゲインが…？」
「はい。ギアと同じように奏者の心象による影響と思われます。そこで、本題なんですが…」

よいしょ、とエルフナインは何やらバックルのようなものを取り出す。

「…これは？」

「ギアの変化によってフォニックゲインの質も変わるなら、と思って…

逆にフォニックゲインの質さえ取り出せてしまえばそのギアを纏えるのでは、と考えて作ったのがこちらです」

「…つまるところ、仮面ライダーよろしくフォームチェンジ機能を搭載したバックル、ってことか」

「仮面ライダー…？」

「…いや、まぁ要はバックルに保存されたフォニックゲインを読み取ってギアをチェンジ出来るって代物だろ？」

「はい、イグナイトモジュールが使えなくなった今、新しいシステムを模索していたので、クリスさんに試験的に使って欲しいんです」

今まで使っていたイグナイトモジュールは、アダムとの最終決戦でダインスレイフの欠片を焼却した為使えなくなった。

エルフナインが研究室にこもりっきりになることがしばしばあったのは、新システムの模索の為もあったからだ。

「いいぜ、あたしに任せろ。つっても、何すりゃいいんだ？」

「今まで纏ってきたギアにあるフォニックゲインの保存から…と言いたいのですが、

一つのギアのフォニックゲインをバックルに保存してから使える

ようになるまで1日は掛かってしまう上に、
保存中は他のフォニックゲインを保存することは出来ないので…
明日、今バックルに保存中の【うたずきん】の試験運用と、新たなギアのフォニックゲインの保存をお願いしたいんです」

「明日、か…」

明日、そういや録画予定のアニメが何本かあったな…ソイツぁ丁度展開的にアツいからあんまり後回しにはしたくねぇんだが…

「ちなみに、今後は心象の変化によるギアの変化、そのままフォニックゲインの保存までも考えてはいるので…
クリスさんが変化したいギアのフォームがあるなら、バックルを使ってギアのチェンジが出来るようにします」
「分かったやるぞ何なら今すぐ最速で最短で一直線にだッ！」

即決だった。

あたしがなりたいギアのフォームを考えたら、ソイツを使えるようになるんだ。

つまり。

「あたしが…ガンダムだッ！」

ケース1：ガンダムの場合

つづくッ…？

ケース1：ガンダム・イチイバル【前編】

～前回のあらすじ～

叔父様との訓練でギアの変化が発覚した雪音。その後、エルフナインから新たなシステムの試験を手伝って欲しいと頼まれ、意気揚々と快諾した雪音だった…

ところで、その…がんだむ、というのは一体なんなのだ？雪音がさぞ高揚するものだろう、私も気になって仕方無い…

ケース1：【ガンダム・イチイバル】

翌日。学校が休みだったから、あたしは朝っぱらから本部に向かうつもりだったんだが…

家のチャイムが鳴る。一体誰だァ？こんな朝っぱらから景気の良いヤツじゃねぇか…

「先輩。おはようございます」

「デース！」

後輩2人（きりしらコンビ）があたしの家に来たようだ…どうしたんだ？

「よう…朝から元気だなお前ら…いきなり家に来てどうした？」

「実は…」

「学校が休みなので、クリス先輩のお家へ突撃隣のなんちゃらデース！」

「あいにく今は朝な上にメシも用意してねぇよ。…すまねぇが、あたしはこれから本部に訓練しに行くんだ」

「えぇっ!?クリス先輩が朝からっむぐっ!?」

「切ちゃん。いくら明日の天気予報が撃槍が降り注ぐかもってぐらい驚く事だとしても、今は朝だよ？しー…」

「おい…随分好き勝手言ってくれんじゃねぇか…今すぐ撃槍の代わりにミサイルを降らすぞ？」

「「すいませんそれだけは本当に勘弁してください（デス）」」
謝るならそれで良い。
「むう…じゃあ、あたし達もついていくデス」
「私も丁度訓練したかったところ。先輩が良いなら、行きたい」
▼　きりしらが　ついていきたそうに　こちらを見ている！
連れていきますか？
↓はい
ＹＥＳ
Ｊａ
ウィ
是
…ダメだ、あたしの選択肢の中にいいえが存在しない…何ヶ国存在するんだよ、あたしの肯定。
まぁ、断る理由も無いんだがな…
「しょうがねーな、良いぜ…その代わり、だ。今日のあたしの訓練の相手になってくれ。今回の訓練ってのはちぃとばかし特殊でな…」
あたしはコイツ等に一通りの流れを教えた。すると…
「あたしもそれ、滅茶苦茶やりたいデスよ！クリス先輩ズルいデスッ！」
緑のちみっこい方、切歌のヤツが凄い食いついてきやがった。
「き、切ちゃん…？」
流石のテンションの差にもう片割れの方、調のヤツが
「もし切ちゃんがデスサイズだったら私、併せれる機体がないよ？」
それにしてもこのツインテール、ノリノリである。
多感な時期だからアニメにハマっててもおかしくなかっただろうが…
まさか知ってるたぁ思わなかったぞ…
「…とまぁ、置いといて、だ。今回はモチーフをガンダムにしようと思ってたんだよ、あたしは。
でもまぁ、正直なところどのガンダムが良いかなって悩んでたところだからな」

「あー…実はあたし…前々から思ってたことがあるんデス。
クリス先輩って、ヘビーアームズみたい、って…」
「…あたしもそれ、真っ先に思い浮かんだわ」
普段のあたしのイチイバルの扱ってる武装がもうまんまと言っても過言じゃないぐらいには、
ヘビーアームズとの相性は良いのは分かってる。んだが…
「でもな、ヘビーアームズをモチーフにしちまうとよ…普段のあたしのスタイルと、マジで遜色ねぇんだわ…」
実弾のマシンガンからビームのマシンガンに変わってたり、近接戦用のアーミーナイフ、後付だがビームサーベルが付いてくる等…
そういった細かい点での変化はあるが、戦闘スタイル自体に大きな差異が無いの故に、バックルにわざわざ保存する程のチョイスでもない。
「それじゃあ、一体…」
「…あっ！なら、いいとこ取りすれば良いんデス！」
…ほう。コイツにしちゃあ良いセンスだ。その発想はなかったな、ジュースを奢ってやる…ウチにあったやつだが。
「ほらよ。たまには冴えてんじゃねーか。それ飲んだら行くぞ」
「…!?あ、ありがとうございますデス…（調、なんかクリス先輩…最近雰囲気変わったデス…）」
「あ、ありがとう先輩…（切ちゃん、私もそう思う…心境とかそういうのじゃなくて、元々そういう素質があったんじゃないかな、これ…）」
方向性が決まったんだ…後はイメージするだけだ…可愛い後輩達に、カッコいいセンパイの…【ガンダム・イチイバル】を見せてやろうじゃねえかッ！

後輩たちを連れて本部に着き、エルフナインの研究室へ向かう。
「おーっす。おはようエルフナイン、来たぞ」
「エルフナイン、おはようございますデース！」
「おはよう、エルフナイン…来ちゃった」

「クリスさん…と、切歌さん、調さん、おはようございます。クリスさん、もしかしてお二人も…？」
「あぁ。朝っぱらからウチに来たもんだから丁度良いと思ってな。どうせこの先使うことになるんだったら早い段階で知らせても問題ねーだろ？」
「はい。寧ろデータが多く取れる方が研究も進みやすくなるのでとても助かります！
なので、お二人には今回、クリスさんの訓練相手になってもらいたいんですが…」
「問題ナッシングデース！いつでもバッチこいなのデス！」
「私達二人がかりだったら、いくら先輩とは言え流石に不利。だから、これは先輩を越えるチャンス…」
どうやらコイツ等もやる気満々で何よりだ。
「良いぜ…センパイだからな、それぐらいハンデがあっても構わねえ。だが…手加減無しだぜぇ？」

トレーニングルームで配置に着く。
「…で、おっさん。なんで今日も立ち会ってんだ？」
「万が一の事に備えてだ。今回の訓練は特殊だからな…なにせ、新システムの試験運用を兼ねた訓練だ、万全に備えるのに越したことはない。
なに、気にすることはない。俺は見守っているだけだ、安心して訓練に集中して欲しい」
「あーそうかい…色々と気を遣い過ぎるおっさんだッ！」
「Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ…」
「万が一があっても、万が二で止めるデース！」
「Ｚｅｉｏｓ　ｉｇａｌｉｍａ　ｒａｉｚｅｎ　ｔｒｏｎ…」
「先輩の運命は、私達が決める…！」
「Ｖａｒｉｏｕｓ　ｓｈｕｌ　ｓｈａｇａｎａ　ｔｒｏｎ…」
あたし達は聖詠を歌い、ギアを纏う。…なんか今、コイツ等が変な

ことを言ってたような気がしたが…まぁいいか。
今回は先にバックルが問題なく【うたずきん】のフォームにチェンジ出来るかどうかと、
その後新しく変化させたギアの保存、この２つを行う試験運用を兼ねた訓練だ。
なので、最初はまだいつものイチイバルにしている…この時点で若干、このバックル要らねぇんじゃねえの？って思っちまったけどな…
「あれ？クリス先輩のギア…いつも通りデス？」
「うん。変わってないね…失敗？」
「いや…クリスくんにはとことん驚かされるな…今はわざと本来のスタイルに戻している。なかなか出来るものじゃあないぞ」
「相変わらずその油田もびっくりするような洞察力は一体どっから湧いて出てくるんだよ…」
ちょっとばかし照れくさくなる…褒めてもなんも出ねーからな!?
とりあえず、そろそろ始めるか…
エルフナインから渡されたバックルとカードケースのようなものを腰に装着する…これ、なんか仮面ライダーっぽいな…
【イチイバル！アルバムクリス！】
～～♪～♪～♪（クリスの聖詠時のメロディー）
…おい、何やら変な音声が聞こえたような…
とりあえず、一旦聞かなかったことにするか…
「えっと…コイツをバックルの上から差し込んで…」
カードケースから取り出した【うたずきん】を纏ったあたしのギアが描かれたカードをバックルの上から差し込むと…って、えっ？
【イチイバル！トラック１！うたずきんッ！】
～～♪～♪～♪（とどけＨａｐｐｙ♡うたずきん！のイントロ部分）
また変な音声が流れてきやがった…おい、エルフナイン、まさか…
「えへへ…クリスさんが言ってた仮面ライダーというものが気になったので観ました」
「おまっ…昨日の今日だぞ!?いくら何でも早すぎんだろ!?」

速い…速さが爆発しすぎてストレイト・クーガーの兄貴もびっくりな文化の吸収スピードだぞ…
まさかエルフナインまで影響されるたぁ思わなかったぜ…いや、面白いのは分かるんだがな？仮面ライダー。
これ新しいあたし達のシステムのテストだよな？遠慮なく要素をぶち込んで良いのかよ…
…いや、あのバカに関しちゃなんか様になるよな、アイツ格闘タイプだし。
【トラック１！Ｍｕｓｉｃ…Ｓｔａｒｔ！】
とか言ってたら、いつの間にか【うたずきん】にギアが変化してたようで。
「わぁあ…クリス先輩、とっても可愛いギアデス…！」
「切ちゃん。今日一眼レフとか持ってきてたりしない？永久保存したいレベルの可愛さだよ、これ」
「いやぁ…流石に一眼レフまで持ってきてないデス…あとで緒川さんに焼き増しを頼むデスが…」
と、気づけば後輩たちがどっから用意してたのか、デジカメであたしをフラッシュの嵐にぶち込んでいた。
「～～ッ！お前らっ!?今日は訓練ってことを忘れてねぇか!?見せモンじゃねえよコイツぁ！」
流石にカメラで撮られるのは恥ずかしいに決まってんだろ…！
【ＨＡＰＰＹ　ＳＵＮＳＨＩＮＥ　ＢＵＬＬＥＴ】
「フラッシュの嵐にはフラッシュの炸裂弾で返してやるッ！」
「…うおっ」
「まぶしっデス」
アイツ等の視界を奪っている間にあたしはバックルからカードを取り出す。
【Ｍｕｓｉｃ，Ｆｉｎｅ…】
という音声が流れ、あたしのギアは元に戻った。どうやらこのカードがいわゆる変身アイテムらしい。
【うたずきん】のカードをケースに入れ、ブランクカードを取り出し、

バックルに差し込む。
そして、視界が回復したアイツ等がとても残念そうにしていた。
後であのデータ、回収しねぇとまずいのは確定的にあきらかなんだがな…
とりあえず。
「うう…いきなりひどいデスよ先輩…」
「切ちゃん。後でいくらでも見れるから…今は訓練に集中しないとまずいかもだよ」
「よぉく分かってんじゃねえか…辱めを受けた分、キッチリ返してやるッ！」
あたしは一度ギアを解除して、もう一度ペンダントを構える。
…始めるぞ、あたしの変身ショーをッ！
「これがあたしの…【ガンダム・イチイバル】だァッ！」
つづくッ…!?

ケース1：ガンダム・イチイバル【後編】

～前回のあらすじ～

マリア・カデンツァヴナ・イヴよ。クリスの家にやってきた切歌と調。丁度良いと訓練に誘われ、新システムの試験運用兼訓練に参加することに。

そしてまた、クリスのギアに新たな変化が訪れるようね。

…ところで2人共、そのカメラにあるデータはいくら出せば貰えるのかしら？

私のクリスコレクションに加わるのなら…これくらいの出費、安いものッ!!

「これがあたしの…【ガンダム・イチイバル】だァッ！」

「Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ…」

再びギアを纏い直したあたしは、少し…じゃねえ、かなりの違和感を感じた…なんつったってな…

「…わーお」

「でっ…デェェェス!?く、クリス先輩が…ホントにガンダムになったデスッ!?」

「ガンダムヘッドのギア…だとぉッ!?」

「…すげェ。なんだこれ。視界がまるで別世界みてーに見えるぞ」

そう。あたしは今素顔が見えない状態…まるっきりガンダムタイプの姿になっていた。

そして。

「なんだ?これ…ゲージか?…９９９?なんだこりゃ」

あたしの視界の右下辺りに映るゲージと９９９の数字。こいつぁもしかして…

「…時限強化式のようですね。どうやら最大９９９秒持続する強力なタイプのギアですね、ゲージが無くなると強制的にギアが解除されるみたいです」

解析中のエルフナインからの通信が入る。
「基本的には普通に戦っていれば今のところ約１６分は維持できるんですが、エネルギーの消費が激しい技等を使った場合ゲージの減りが速くなるので…
ざっと見積もって平均１０分しか使うことが出来ないですね…」
エルフナインの解析が早すぎる…オマエ普段そんな感じで仕事出来たんだな…
「ということは…」
「１０分耐えれば私達の勝ちデース！」
時間制限があることを知って強気に出てきたぞコイツ等…まぁいい、要は…
「はッ！１０分でテメー等に白旗振らせりゃ問題ねーんだよなぁッ！」
バックルのレバーを下ろす。すると…
【ＮＥＷシングルッ！】
ピピピピピピ…
【ＤＥＢＵＴッ！【ガンダム・イチイバル】ッ！】
バックルの中に差し込んでいたブランクカードがヘビーアームズの絵に変わっていった。
…ちなみに今の姿は別にヘビーアームズじゃねぇんだがな…一番あたしのスタイルに近いからかそれになったみたいだ。
――ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ――
（推奨ＢＧＭ：ＲＨＹＴＨＭ　ＥＭＯＴＩＯＮ）
訓練の開始の合図が鳴る。
「１０分しかね―のか、１０分はある、のか…ソイツは考え方次第だ。あたしは１０分で十分だッ！」
【ＧＲＥＡＴ　ＩＭＰＵＬＳＥ　ＲＩＦＬＥ】
バスターガンダムをイメージして発現したビームライフルとガンランチャーを連結した、通称・グゥレイト砲を二人に向けてブッ放す。
今回のトレーニングルームの設定は市街地をイメージした場所になってるからな、諸共ブッ飛ばしゃ良いだろッ！

…視界の隅っこでさり気なくおっさんが地面割ってガードしてたぞ…やっぱ人間じゃねえ。
「でえええ!?なんデスかあのトンデモはァーッ!?」
「凄い…これがガンダムの力…」
どうやら寸でのところで避けやがったみてえだが…
この威力、自分で使っててエゲツねえな…もしあたしがアイツ等の立場だったらぜってー喰らいたくねぇ…
「言ってる場合デスか!?調、逃げるが勝ちデスッ！」
「了解…トランザム」
【非常脱獄式（ひじょうだつごくしき）・禁月輪（きんげつりん）Ｆ（ふる）う流（ス）ス髏（ロッ）ＴＴｔＲ（トル）ウ】
ツインテールのちっこい方がそう言うと二人のギアのパーツが一部分離して二人乗りのバイクを作り上げる、そのままあたしからぶっ飛ぶように逃げていく。
おいおい…ブースターまで付いてるじゃねえか、カッコいいな…
って関心してる場合じゃねえ、コイツ等本気で１０分間逃げ切ろうとしてやがんな？
「面白え…あたしと鬼ごっこがしてえって言うんなら…付き合ってやるぜぇッ！」
あたしと後輩二人との楽しい１０分間耐久鬼ごっこデスレースの火蓋が切って落とされた…

市街地を駆け抜ける。音速スピードでトンデモ兵器をぶっ放してきた先輩からなんとか逃げてきた私達。このバイクが無ければ即死だったよ…いや割とガチで。
「や、ヤバかったデス…まさかこれを早く使うことになるなんて…」
「仕方ないよ切ちゃん。アレをまともに喰らってたらいくら訓練用に調整されてるって言っても全治一週間は免れ無さそうな威力してたよ、多分」
「それにしてもクリス先輩…追いかけて来ないデスね」

…切ちゃんに言われて気付く。そう言えば先輩が追ってきている気配がしない。
「もしかして…追いかけて来ないんじゃなくて…」
悪寒が走る。咄嗟に右に避けるとビームの風がひとつ。
「…ッ!?一体どんなところから狙ってるの先輩!?」
「あわわわ…この感じ…アタシ達の事を狙撃して倒そうとしてるデス!?」
そして避けた先の真正面からビームの光が…って…!?
「まずいっ…!切ちゃん、分離するッ!」
「合点承知の介デス!」
バイクを分離させてなんとか回避する…なんで前からビームが飛んできたんだろう…?
「し、調ぇ!前から先輩が!」
「ッ!?なんで…!?」
「と、思うだろうなァ?ソイツはダミーだッ!」
【ＤＵＭＭＹ　ＦＵＮＮＥＬ　ＢＡＬＬＯＯＮ】
前に先輩が居ると思ったら後ろから声が聞こえた…嘘…もう追いついたの…?
「なんで追いついたの?って顔してやがんな…なら教えてやるよ、答えは…コイツだッ!」
ダミーバルーンが喋る…ッ!?えっ、嘘、ファンネルでダミー?しかも喋るの?色々規格外過ぎるよ…
「コイツを作んのにちぃとゲージを使っちまったがな…そんだけ隙を作れりゃ十分だ」
そう言ってバルーンからビームが飛んでくる。その上、数が増えてくるから避けるのに必死…こうなったら!
「いくよ切ちゃん…ここを切り抜けなきゃ勝ち目が無いみたい」
【α式・百輪廻】
「やるしかないデス!バルーンには刃物がテキメンデース!」
【切・呪りｅッＴお】
私達はバルーンを破壊していく。このバルーン、割れたら爆発する

タイプだから遠距離攻撃じゃないと危ない。
爆発するということは…爆風で視界が塞がるということでもある。
それを狙って破壊してからまた逃げる…つもりだった。
「つぅかぁまぁえぇたァァァァァァ!!」

振り切れたと思った二人を近距離まで捉えた。
まぁ…Ｖ２ガンダムをイメージしたら光の翼で追いついちまったんだがな、かなりゲージ使っちまったけど。
バルーンを破壊して出来た爆風に紛れて逃げようとしてた様だが…今のあたしにはそれを突っ切ることが出来る。
【ＣＨＯＢＡＭ　ＡＲＭＯＵＲ】
「く、クリス先輩がチョバムアーマーを着てこっちに突っ込んでくるデス!?」
「切ちゃん、色々ツッコミたいところがあるけどこれ…不味くない？」
「ブッ飛べッ！アーマーパージだァァァァッ！」
着ていたアーマーを周囲にブチ撒けた。残っていたバルーンにも当たって、お互いの姿が見えなくなる。
…ったく、マジかよ…お前らロボットアニメの観過ぎなんじゃねえのか…
「あ、危なかったデス…」
「シェルターが無ければ即死だった…ナイス変形だよ、切ちゃん」
【緊急（きんきゅう）ν（ニュー）式（しき）・愛（アル）ｒ（テ）ウ（ミ）て実（ス）いｓｓ】
視界が開けるといつぞやのメカに変形してた時のように、ギアを変形していた。…ん？おい、コイツ見たことあるぞ…Ｘアストレイ辺りで。
「流石の先輩でも、このアルミューレ・リュミエールのシェルターは…突破出来ないはず」
「調？アタシはザクレロにしたかったんデスけどなんで違う姿になってるんデスか？後でゆっくりＯＨＡＮＡＳＩがあるデスよ？」

「き、切ちゃん？今は攻撃するより耐えた方が良いんだよ？えっ、なんで擦り寄ってきてるのちょっと待って今訓練中だよ？」
「…そういうのは…家でやれ…よッ！」
【ＧＲＥＡＴ　ＩＭＰＵＬＳＥ　ＲＩＦＬＥ】
「（…チッ）…おぉ～、このアルミューレ・リュミエール凄いデスッ！流石あたし達のユニゾンデス！」
「…ナイス先輩」
　ツインテールのちっこい方が何故か礼を言ってきたんだが…あたしはコントを見てるみたいだったからついイラついてブッ放しちまっただけだ。けどやっぱ、モチーフにしてる機体なだけに防がれたか…
　しかもおまけにＮＪＣ（ニュートロンジャマーキャンセラー）を搭載してると来た。どうやら本気で耐え抜くらしいな。
　あたしの弾丸が通じねえってんなら…奥の手だッ！
「おいお前ら…確認するぞ？フル出力でアルミューレ・リュミエールを張ってるな？そのシェルターは…完璧なんだな？」
「勿論」
「アタシ達の無敵さを思い知るデス！」
「…了解だッ！」
「クリスさん！残り2分を切ってます！ここからは消費が激しい技を使えばギアが強制的に解除されますッ！」
　…ゲージを見る。カウントは残り１００を切っていた。
　仕方ねぇな…あたしが、〝センパイ〟たる所以を教えてやる…！
「…クリスさん、まさか…ッ!?」
「待つんだクリス君！これは訓練だぞッ！」
「訓練だからやるんだろッ！」
　おっさんが制止に入ろうとしてきたが…もう遅いッ！
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ
　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ

Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ
Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｚｉｚｚｌ…」
「なッ…!?」
「ぜ、絶唱ッ!?先輩、何をしてるんデスか!?」
バッテンマークのデスガールの後輩が叫ぶ。まぁ、そんな反応は予測済みだ。
だがな…
「センパイの意地ぐらい、分かりやがれってんだよォッ！」
【ＴＷＩＮ　ＢＵＳＴＥＲ　ＲＩＦＬＥ】
ＥＷ版のウイングゼロをイメージして発現させたコイツで…最大出力でぶち抜くッ！
チャンスは3回だ…いくぜ…
一発。
アイツ等のシェルター部分に直撃する。
「…調…これ、ホントに大丈夫デスか…？」
「だ、大丈夫のハズ…このシェルターの硬度を越えなければ、だけど」
二発。
もう一度シェルターに直撃する。
シェルターにヒビが入る。
「し、調ッ！ひ、ヒビが入ってるデスよ!?」
「…まさか…本気でこのアルミューレ・リュミエールを突破しようと…!?」
三発。
シェルターに直撃し…火力に耐えることができずにアルミューレ・リュミエールが解除された。
「デェェェェ!?」
「あぁ…白い光…綺麗…」
ビームに飲み込まれたアイツ等は吹っ飛んで二人で地面とランデブーしていった。
「あたしは…スーパー適合者…雪音…クリス、だ…」

その後、ギアが強制解除され、あたしにもランデブーの時間が訪れた…

――ＢＡＴＴＬＥ　ＥＮＤ――

つづくッ…？

番外編：〝それでも〟と〝だとしても〟

どうも～こんにちは、私、立花響、１７歳です。
え～、わたくしは今、未来と一緒にクリスちゃんの家にやってきています。
えっ、何しに来たんだって？
学校も訓練も休みだから、遊びに誘うつもりだったんだけど…
「ひっぐ…うっ…ダグザのおっさん…あんなの…人の死に方じゃねぇよ…！」
…そうですよ、そのつもりだったんですよ、ホントに！
その結果がコレなんだよッ!?
早起きして、朝から未来と一緒に今日は何して遊ぶか考えて、今はこうしてガンダムＵＣ（ＯＶＡ版）を一気観しているッ！
これ以上何をどうするっていうの!?どこまで観ればいいって言うの～!?
っていうか、クリスちゃんめっちゃ泣いてる…私達と一緒に観てるってこと忘れてるんじゃないかな～…？
「…いっちゃえユニコーン、心（ハート）の全部…ッ！」
えっ、未来？嘘でしょ？それ自分のセリフじゃなかったかな～…？
めっちゃノリノリじゃん。
「み、未来？クリスちゃん？今日はもしかして…ずっと観るなんて事…ないでしょ～か…？」
「何言ってやがんだ（るの）？当たり前だろ（でしょ）？」
えっ、マジすか？
まさかの未来がグルだったことに驚愕を隠せない私。
「いやぁ、前々から思ってたんだよな、バナージってお前とよく似た事言ってるじゃねぇか、「それでも！」ってな」
「響は「だとしても！」って言ってたじゃない？似てるよね、ってクリスに言ったら直ぐに鑑賞会することになったのよ」
確かに言ってたね、ついこないだの話だけどさ…
サンジェルマンさんに問われて導き出したたったひとつの私の答

え。
それは圧倒的で強大な力の前であっても貫き抗う言葉。
そして、ガンダムＵＣの主人公であるバナージ君の〝それでも〟。
どうにもならない残酷な現実の前であっても可能性と希望を信じ言い続けた言葉。
なんとなく、通ずるものはあるのは分かったんだ。でも…
「だとしてもおかしくないかな!?私もう観たことあるんだよッ!?」
…実は既に視聴済みだったんだよ、うん。師匠のお陰でね…
「観たことあるんだったら尚更都合が良いなぁ…？」
ちょっと悪い顔したクリスちゃんが言う。かわいい。
「うん。カッコいい響が見てみたいものねぇ…？」
かなり悪い顔した未来が言う。こわかわいい。
って、そうじゃなくて…
「もしかして…私もアレ、やるんですかね…？」
「あったりめーだろ！後々新システムとして運用することになるかもしんねぇからな。
今の内に慣らし運転しときゃ感覚は掴めるだろ？」
こないだクリスちゃんが切歌ちゃん達の訓練でやってたようなギアの変化（リビルド）のことだろうね…
なんでも、バックルを使ったなんちゃらとか。詳しい話は分かんなかったけど。
「言われてみれば、確かにそうかもしれないかも…でもだよ？クリスちゃん。一つ重大な事を忘れてないかい？」
「重大な事…？お前がスットンチンカンって事ぐれえしか思い浮かばねえぞ？」
「ちょっとクリス。流石に言い過ぎ。せめて〝ちょっとスペシャルな子〟ぐらいじゃないと」
いや～…２人共…私の普段の認識、ちょっと酷くないですかね…？
「ヒドいよ～…じゃなくて！私！武器っぽい感じのアームドギア、出せないよ？」
「…あっ」

２人共声を揃えてから少し黙る…えっ、もしかしてホントに忘れてた？
「…ユニコーンガンダムは伊達じゃねぇんだ、武装が無くたって戦ってたろ？ネオジオングバラバラ解体ショーの時によ」
「そうよ、響がユニコーンになるのもなんら不思議じゃないの。アームドギアが形成出来なくてもね」
「…だったら、ユニコーンじゃなくてゴッドガンダムが」
「Ｇガンは余りにもハマり過ぎてる上に戦闘スタイルがあんま変わんねえから却下だ」
「そ、そんなぁ…一番観たのＧガンダムなのに～…」
「まぁ響の事だからそんな事だろうと思ってた」
うぅ、２人共…そうまでして私にユニコーンを推すんだね…
「うし、観てるって分かったんだ、話が早え。今からトレーニングルームに行くぞ」
「うえぇっ!?今から行くのッ!?もうお昼過ぎちゃってるよ～！」
「響。頑張って訓練してきたら今日は渾身のビーフストロガノフを作ってあげるから」
…うーむ、未来のビーフストロガノフかぁ…悩み難きや…
「遅かれ早かれやるモンだったんだ、今から行くぞ、あたしとファイトしやがれッ！」
「クリスちゃん、それじゃガンダムファイトの方になっちゃうよ…」
やる気満々のクリスちゃんに対して遊ぶ気満々だった私はそんなに乗り気じゃなかったんだけど…
こないだダインスレイフの欠片燃えちゃったもんね、エルフナインちゃんが頑張って研究してるなら私も協力しなくっちゃ！

さて、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部にやってまいりました。

「おーっす、エルフナイン居るか？」
　クリスちゃんが呼びかけるとひょっこりと顔が出てきた。エルフナインちゃんだ。その仕草がかわいい。
「はい、クリスさん。おはようございます、響さんと未来さんも来てくれたんですね」
「おはよう。クリスが響と訓練したいって言うからそれを見に来たの」
「私は久し振りの休日だったから遊びに行きたかったのに～」
「もう、響？また今度改めて時間作ってあげるから今日は頑張ろ？」
「そうだぜ、ホントはあたしも家でアニメとか観たかったけどよ、【リビルド・バックル】でのギアの調整をしねーといけねえからな…」
【リビルド・バックル】？ってもしかして前に切歌ちゃんと調ちゃん達の訓練で使ってたっていう？」
「はい。まぁクリスさんはそれでちょっと無理をしてしまったので…また調整が必要になったんです」
　なるほどね…クリスちゃんが切歌ちゃん達と訓練した時に絶唱を歌ったって聞いた時ホントにビックリしたもん。
　クリスちゃんを本気にさせたらそこまでしちゃうんだね…ちょっと気を付けないとまたやっちゃいそうじゃない？大丈夫？
「あー…流石にこないだのはちぃとやり過ぎちまったからな。今回は多分そこまで無茶しねーよ」
　私の顔を見てクリスちゃんが答えた。なに？エスパーなのクリスちゃん？
「オマエの表情見りゃ分かんだよ。単純だからな」
「クリスの言う通りよ。響ったらすぐに思ったことが表情に出ちゃうんだから」
「あ、あれ～…？私ってそんなに顔に出ちゃったりするの～…？」
「おう」
「うん」
「はい…ってあっ」
　２人…と思いきやエルフナインちゃんまで～!?

「…とまぁ、それは置いといて。はい、響さん」
エルフナインちゃんからリビルド・バックルを渡される。
すごい…まるで仮面ライダーの変身アイテムみたいだねこれ…
エルフナインちゃんからバックルの使い方を説明されて、いざトレーニングルームへ。

「では、これよりクリス君と響君のリビルド・バックルを使った模擬訓練を始めるぞッ！」
トレーニングルームにて。どうやら今回も師匠が立ち会うみたいだ。
訓練の舞台は…インダストリアル7？えっ、マジっすか？
「…おっさん、もうなんつーかな…今回もかよ…」
…あっクリスちゃん、コレはスルーするんだ…
「クリス君は前回、無茶をしすぎたからな。今回はマズいと思ったら容赦なく止めに行くぞ？」
「わーったよ、流石にもう絶唱まではいかねぇよ」
「…それが聞ければ十分だ。響君も、今回から初めてバックルを使うんだ、無茶だけはしてくれるなよ？」
「分かってますよ、師匠！それに私、今回はバックルに保存するだけなんですよね？」
今回は変化（リビルド）したギアのフォニックゲインをバックルに保存する…みたい。
エルフナインちゃんが言ってた。言ってること全然分かんなかったけど。
「響。保存するだけでも前回クリスが無茶をしたんだから、気をつけてって司令は言ってるのよ？」
「…お前ら、どれだけあたしの傷口をえぐりゃ気が済むんだよ…」
「ま、まぁまぁ！それだけ切歌ちゃん達が成長してたって事だよ！ね？」

クリスちゃんがちょっと涙目っぽくなってたから助け舟を出した。
クリスちゃんかわいい。
「…はん、まぁ…その？アイツ等が成長したのを見届けてやるのも？先輩の努めだもんな？」
クリスちゃん、すごく嬉しそうだね…
でも、切歌ちゃん達そんなに強くなってるんだ…今度訓練で手合わせしたいなぁ。
「…んじゃ、そろそろおっ始めんぞ、覚悟しやがれバカ野郎」
「Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ…」
クリスちゃんが聖詠を歌ってギアを纏い…
【イチイバル！アルバムクリス！】
【トラック２！ガンダム・イチイバルッ！】
そしてリビルド・バックルを着け、カードをバックルに差し込むと…クリスちゃんが…
「え、えぇ～ッ!?クリスちゃんがガンダムにぃッ!?」
「…あー、そういやお前はコレ、まだ見たことなかったんだな、その反応だと」
「うわぁ…すごい、これホントにクリス？どう見ても頭がサバーニャにしか見えないけど…」
カラーリングは違うけどね、やっぱクリスちゃんは赤が似合うッ！
…っと、いけないいけない。私も準備しなくっちゃね…！
「行くよッ、クリスちゃんッ！」
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ…」
聖詠を歌ってギアを纏う…良かったぁ、どうやらうまくいったみたい。
「ユニコーン…だとぉッ!?」
「…おぉ～、スゲェな。まさか”一本角”の方でイメージしやがったか」
「見た目はフェネクスって感じね、色の所為だと思うけど…素敵」
そして私はバックルを装着して真っさらなカードのようなものを

バックルに差し込み、レバーを下ろした…
　これ、なかなかイイですなぁ…カッコよくてホントに仮面ライダーになった気分だよ！
【ガングニール！アルバム響！】
【ＮＥＷシングルッ！】
　ピピピピピピ…
【ＤＥＢＵＴッ！【ガンダム・ガングニール】ッ！】
　カードに描かれたのは何故かゴッドガンダム。あれ？今のモチーフってユニコーンのハズなんだけどなぁ…
　って、クリスちゃんのカードもよく見るとヘビーアームズだった。戦闘スタイルに似てるものが描かれるのかな？
　とりあえず。
「…私のたった一人の陽だまり…花咲く勇気…へいき、へっちゃら…お父さん…」
「…未来、クリスちゃん、ごめん、私……行くよッ！」
（心に従え、立花響…だとしても、と言い続けろッ！）
　…かつての強敵（とも）だった人の声が聞こえたような気がした。
　…じゃあ、このユニコーン形態、早く解かなくっちゃね？
「私の声に応えろォッ！ガングニィーーーーールッ！」
　ガングニールの名前を叫ぶと、一本角が割れていく感触がした。
　そうそう～これこれ、やっぱガンダムって言うならこうでなくっちゃ！
「んなッ…!?」
「嘘、角が割れた…!?」
「ゴッドガンダム、だとォッ!?」
　…心なしか、師匠が嬉しそうにしてる。まぁ私と一緒に観ましたもんね、それにＧガン大好きですからねー。
　――ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ――
　訓練開始の合図だ。
「行くよクリスちゃん…！」
「おいバカ！てめぇＧガンは却下って…」

最速で。
最短で。
一直線に。
「この想いを伝える為にィィーーーーッ！」
クリスちゃん目掛けて突っ込む。そして、背中に腕を回してガッチリホールド。そのままインダストリアル７から押し出すように上昇していく。
あっ、クリスちゃんの胸が顔に当たる。めっちゃやわらかいよ～！
「～～～～～～ッ！テメっ…！ここから…出ていきやがれェッ!!!」
【ＭＥＴＡＬ　ＰＥＥＬ　ＯＦＦ　ＥＦＦＥＣＴ】
それ…私が言うべき台詞だったんじゃ…？
って、クリスちゃんが質量を持った残像を纏ってる!?
クリスちゃんが腕の中からすり抜けていった。
「クリスちゃんがＦ９１に…？あ、なるほど」
…もしかしてクリスちゃん、１ｃｍおおきｋ
「それ以上、ヘンなこと、考えてんじゃ、ねぇよッ!?」
【ＶＡＲＩＡＢＬＥ　ＳＰＥＥＤ　ＢＥＡＭ　ＲＩＦＬＥ】
あっぶなっ！ヴェスバーみたいなものを容赦無く撃ってくるなんて…
それにしても恥ずかしがってるクリスちゃんが可愛いんだけど。
「響？今日帰ったらちょっとＯＨＡＮＡＳＩしよっか？」
「あっすいませんそれだけは本当に勘弁してください未来＝サン…」
にこやかな笑顔で言う未来。
一見普通に言ってるようにしてか見えないんだけど長い付き合いの私にはわかる…
めっちゃ怒っていらっしゃるよ…あの状態の未来のご機嫌取るの、難しいんだよね…
「余所見してる場合かよッ！」
【ＲＥＤ　ＢＥＡＭ　ＭＡＧＮＵＭ】
今度はビームマグナムっ…!?
うわぁ…掠れただけでビルが溶けちゃったよ…あの威力、直撃した

ら訓練とはいえ痛いだろうね…
「なら…接近戦に持ち込めば良いだけ！」
私、思ったんだ…ガン＝カタを習得しているクリスちゃんといえど接近戦なら私の方が分があるって。
「認識できんのかァ？今のテメェにこのあたしをッ！」
でも…質量を持った残像を今、クリスちゃんは纏ってる…ならばどうする？立花響ッ！
「…それでもッ！だとしてもッ！」
だったら、ただ本物を見極めれば良いだけの話なんだ…！
「見えたッ！水の一滴ッ！」
【我流・明鏡止水】
精神を統一して…私の体中が黄金に光り輝いた。
視界には分身にしか見えないクリスちゃんがいっぱい映ってるけど…
今の私にはッ！そんなの関係ないッ！
「…！そこだぁぁぁぁッ！」
「んなッ!?なんで分かんだよ!?」
私の拳がクリスちゃんの頬を掠める。どうやら本物のクリスちゃんを当てれたようだ。
「…なんとなく、そんな気がしたからって理由だったんだけどね、要はこういうのって山勘だよ、うん」
「デタラメにも程があんだろッ!?…チッ、こうなりゃ…」
私から距離を取るクリスちゃん…何かするつもりだ、その前に距離を詰める！
「トランザムだッ！」
【ＴＲＡＮＳ―ＡＭ　ＳＹＳＴＥＭ】
ギア全体が赤く光るクリスちゃん…ってええっ!?トランザム!?
「わりぃがあんまり時間がねぇんだわ…圧倒させて貰うぜ？」
「く、クリスさん！その技は調整中です！使ったら…」
「あー、わりぃな、エルフナイン…話はベッドで聞くから後でな」
…あれー…？よく見たらクリスちゃんの目に当たる部分がなんか

虹色に光ってるように見えるんですけど…
や、やばっ…あの構えって…
「させないッ！撃槍ッ！ガングニィィィル…フィンガァァァーッ！」
【我流・轟叫撃槍拳】
アレを発動させちゃったらなんかヤバい気がする…届いて私の拳ィーッ！
「ちょっせぇぇぇッ！クアンタムバーストッ！うおぉぉぉぉぉッ！」
【ＱＵＡＮＴＵＭ　ＢＵＲＳＴ】
赤から緑へと光が変わって…まるでユニコーンのサイコフレームの光のように…
あっ、コレ駄目なやつ。例えるなら人を駄目にするソファに埋もれるような…
光に包まれると私たちは…えっ!?すっぽんぽんだよ!?クリスちゃん風に言うとぽんぽんすー。
でも、なんだろう…この感覚…とても心地良いなぁ…
「私達…分かり合えたんだね…」
「あぁ…世界はこんなにも簡単だってことを…」

―イッツターイムナーウ…―

私達は幸せな対話をして訓練を終えたのだった…

―ＢＡＴＴＬＥ　ＥＮＤ―

―――――

訓練終了後。
メディカルルームのベッドに２人仲良くベッドに突っ込まれていました。
特に酷かったのがクリスちゃん。エルフナインちゃんに泣かれて

たよ…
「なんでそんな無茶するんですかぁ…クリスさん…自分をもっと大事にしましょうよぉ…」
　ってさ。そりゃそうだよね…熱くなりすぎて命燃やすレベルまでやっちゃったんだからね…って、クリスちゃんそんなキャラだったっけ…？
「…アニメ見出してから、もしかしたら影響されやすくなったかもしれねぇな…ちっと気を付けねえとな…」
「あ、あはは…まぁ、無事で何よりだったよ…」
　幸いにも２人共々異常はなかったそうです。
　寧ろ身体が軽くなったような気がするんだけど。
　と。メディカルルームに未来がやってきた。
「クリス？響？ちょっとＯＨＡＮＡＳＩがあるんだけど…？」
　未来＝サンがカンカンでいらっしゃる…いや、ね？対話を持ちかけられたら私は無条件で降伏しちゃうからね？仕方ないよね？
「よう。話ってなんだ？訓練の事か？心配かけて悪かったって…」
　クリスちゃん、こういう時滅茶苦茶鈍感なんだね…
「クリスちゃん、今の内に神に祈ったほうが良いよ…」
「んだぁ？藪から棒に。なんであたしが神様なんざに祈りを込めなきゃなんねぇんだ？」
「ふふ…もうクリスったら…」
「ッ!?なに…しやが…る…」
　そう言って未来がＬｉｎｋｅｒとかでよく使うような容器でクリスちゃんの首筋に何かを注入した…って!?
　未来＝サン!?ナニシテルンディス!?
「クリスちゃん!?」
「ひーびき、余所見しちゃ駄目だよ？」
　ぷすっ、という音が聞こえた気がした…あっ…これ駄目なやつだ…
　薄れ行く意識の中最後に見たのは未来のえげつないような笑顔だった…

つづくッ……？

揺らぎの街のクリス編
ケース２：揺らぎの街のクリス

〜前回のあらすじ〜
マリア・カデンツァヴナ・イヴよ。先輩対後輩たちの訓練。先輩としての意地を見せるために絶唱を唄ったクリスは…ってちょっと、前回もあらすじを担当をした気がするんだけれど…どういう事かしら？…なに？出番を考えている？いつ出そうか未定？ちょっとどういう訳!?何がどうなっているというの!?

「…んあぁ…ってぇーな…またか…」
ハロー見知った天井、グッバイあたしの休日…
後輩たちに絶唱を歌ってあのクソ硬ぇアルミューレ・リュミエールをぶち破ったまでは覚えてんだが…その後気を失ったみてーだ。
しっかし、アイツ等も随分成長してやがったな…つい本気を出しちまったぞ…
思い更けてるとあたしのメディカルルームに誰かが来た…誰だ？
「クリス先輩ぃ〜！心配したデスよぉ〜！」
「…先輩、次に無茶したら、先輩といえど許しませんから…ッ！」
噂をすりゃあなんとやらだ…後輩たちが来た。っておい…！
「ちょっ、おい！抱き付いてくんじゃねぇよ!?」
「…簡単には離さない」
「もう無茶だけはしないって約束するデス〜！」
「だぁ〜！もう分かったから離れやがれってんだよ！」
コイツらに心配されるなんてな…ったく、あたしもまだまだみてーだ…ってちょっと待て。
「おい…なんでお前らはそんなピンピンしてやがんだ？」
「訓練だから」
「へいき、へっちゃらなのデース！」
…そういやそうだったな、絶唱のバックファイアは防げなかったみ

てーけどな…
　でも訓練だったから大丈夫で片付けれんのはなんかこう…モヤるよな…
「あたしの頑張り損って訳だな…ちくしょう…」
「まぁそう言うなて。ぬしの歴史に、また1ページ…ってな？」
「お前が特訓を付けた訳じゃないだろう。…失礼するぞ」
　あたしのメディカルルームに突然赤いジャケットを着た白のメッシュが掛かった髪型した男と
　まるで狐の尾みてーなポニテが何本かある金髪で小柄な少女…少女か？が扉の前に現れた。
　…っておい、嘘だろ？まさかコイツ等ってよ…
「…有栖零児（ありすれいじ）に小牟（シャオムウ）…だとぉッ!?」

ケース2：【揺らぎの街のクリス】

　待て待て待て待て、状況が飲み込めねーよ、なんでこの世界に居るんだこいつらが!?
「…何？何故俺達のことを知ってる？」
「わし等、そんな大々的に広報活動なんてしてたっけ？超絶輪人ではあるまいて」
「何を訳の分からんことを言ってる」
「いや待て！訳がわかんねーのはこっちの方だ！なんであたし達の世界にいやがんだ!?」
　…そう、この2人はあたし達の世界には本来居ないはずなんだ。
「せ、先輩？何を言ってるデスか？」
「というか、その口ぶりだとこの2人のこと…知ってそうだけど」
「そこは俺から説明しよう」
　混乱する最中に今度はおっさんが来やがった…どういうこった？
「彼らは超常現象に関するエキスパート、【森羅】というエージェントなんだが…
　彼らは今まで幾度となく世界を救ってきたそうだ。…次元や時空

を越えた、な」
　あぁ…知ってるさ。こいつらは…【ゆらぎ】と呼ばれる次元が歪む現象に関する異変を解決してきたんだ。
「ソイツぁ知ってるっつのおっさん。…問題はそこじゃねーだろ？」
「何故彼らが俺達の世界に居るか…それもまた今回の件に関わっているんだ」
「何がなんだか分からんだらけデス…調ぇ、つまりどういうことなんだってばデス？」
「この人達、私達の世界に何かがあったから私達の世界にやってきた…ってことだよ、切ちゃん」
「おっ、そこな眼鏡が似合いそうなロリ娘よ、なかなか鋭いのう！」
「ろ、ロリ娘…」
「小牟、お前にはお仕置きが似合いそうだな」
「じょ、冗談じゃ零児！…コホン、そうじゃ、まあ現にわし等がここに居ることが事実じゃて」
「なら、なんで私達の世界にやってきたデスか？」
　…それに関しては、あたしは薄々勘付いているところはある、だが一つだけ気になることがある。
「そうだ…おっさん、今回の件ってどういうこった？何が起きてるってんだ？」
「…先程、渋谷にて…【ノイズ】が発生した」
「…ッ!?ノイズだと…？」
　渋谷にノイズが現れた…だって？
「司令、そのノイズって…【アルカ・ノイズ】や【カルマ・ノイズ】の事では無いんですか？」
「…違っていれば良かったさ」
「でもあの時…アイツが【ソロモンの杖】ごと【バビロニアの宝物庫】を封印したはずだぞ？なんで…」
「その封印が解かれたんだ。…【ゆらぎ】の発生によってな」
「それも渋谷と来たもんじゃ。…流石に偶然とは思えんの」
　やっぱりそうか…ゆらぎがなけりゃコイツ等が出て来る訳もねぇ

な…
「ゆらぎ…？って一体なんデスか？」
「ゆらぎっちゅーんは、異世界同士を繋げるゲートみたいなもんじゃ」
「本来、そのゆらぎと言うものはあってはならないものなんだ。…色んな世界の次元の壁がボロボロになった時、あらゆる世界が混乱の渦に巻き込まれた」
「その為にわし等みたいなのが日々活躍しとるっちゅーワケじゃ！」
「…そのおかげで、渋谷周辺の一般市民の避難は完了している。彼らの情報が無ければ、被害が出ていたかもしれん…本当に感謝している」
「そいつは重畳。俺達は元々あまり表立って活動はしていない…動ける時に動けるように尽力を尽くすだけさ」
「妖怪が表立って飛び交ってる世界なんぞ想像したくも無いわ！…混ぜるな危険っちゅうワケじゃ」
「槍に刺されて封印でもされてみるか？」
「…わしも仲間に入れてくれんかのう」
「コントやってる場合かよ！…おっさん、つまりあたし達は渋谷に行けば良いんだな？」
「あぁ。今回は今ここに居る奏者３人に加え、森羅のエージェント２人に向かって貰うことになる。他の奏者にも向かっていってもらいたかったのだが、何故か連絡が取れなくなっている状況だ。…現場での連絡は難しいと考えていいだろう」
「ちっ、電波妨害の類か。…ヤツめ、また何か企んでいるのか？」
「みんな…大丈夫かな…」
「大丈夫じゃ、問題無い…ワシは言っている…ここで死ぬ運命では無い…とな！」
「ワケの分からんことをほざくな。…改めて、俺は零児…有栖零児だ。そしてコイツは…」
「ぬわっはっは！わしが森羅のアイドルマスター、小牟であるぞ！」
「は、ハイテンションのじゃロリガールデース…」
「あながち間違っちゃいない。コイツは人間じゃないからな」

「確か、仙狐ってヤツじゃなかったか？１０００年を越えると天狐っつーのになるんだったな」
「仙狐…って言うと、もしかして、中国の狐の妖怪の事？」
「センコ…？ってなんデスか？調」
「調頼りは調べれず、だよ…詳しい事はネットで調べてね、切ちゃん」
…何気に上手いこと言ったって顔してやがんな…このしたり顔が可愛いじゃねぇかくそったれ…
「わお！乙女の秘密を知っとるとは…お主、ナニモンじゃ？どこの組じゃ？言ってみんかい！」
コイツ、伊達に『森羅の電子の妖精』なんて自称してねえな…まぁそりゃ勿論知ってるんだが。
「そりゃそうだろ、お前ら、元々あたし達の世界じゃゲームのキャラになってんだから当たり前だろ？」
「なに？ゲームだと？」
「わし等、ついに2次元に進出しよったぞ、零児。…もう嫁と会えん日は無いのう」
「そいつは重畳。もっとも、2次元に進出する意味が分からんがな…話がこじれる」
さり気なく惚気けてる辺り緊張感があるのかねーのか分かんねえな…
「まぁそういうこった。少なくともあたしはお前らを知ってる。…あたしはクリス、雪音…クリスだ」
「私は暁切歌デス、クリス先輩の後輩デス！」
「私は調…月読調。…切ちゃんと同じ、先輩の後輩」
「ほうほう…大、中、小、とな！定食屋も驚きのラインナップじゃて！」
「…アームロックをご所望のようだな、喰らってみるか？」
「それ以上いけないデス！」
どんだけコントが好きなんだよ全く…
まぁコイツ等、特に小牟が絡んだらまぁこうなるのはコーラを飲んだらゲップするぐれえ確実だ。
…あたしも随分毒されてるみてーだけどな…そこは気にしない、気

にしたら負けだ。
「ったく…まぁ、よろしくな…奏者の国の…有栖さんよ？」
「とんだウサギが居るもんだがな…奏者の国の…クリス。あと、零児でいい」
「はっ！違いねえな…って、あたしはウサギって柄じゃねーよ…」
かくしてあたし達は渋谷に向かうことになった…

「フフ…待ってるわよ…坊や」

続くッ…？

秩序と鞘と撃槍と

～前回のあらすじ～
クリスちゃんのメディカルルームに突如現れた謎の二人ッ！
超常現象を専門とするエージェントの有栖零児さんと小牟…ちゃん？だった。
その二人が私達の世界に来た理由は『ゆらぎ』というものが渋谷に現れたみたいで…
さらに、あの時未来が閉じたバビロニアの宝物庫のノイズも現れたみたい…なんでだろ？
えっ？私？今何してるかって？…ちょっと変だけど困ってそうな人が居たから…

おっさんの指示であたし達は渋谷に今向かっている。
「そう言えば、零児さんと小牟さん、エージェントと言ってましたが…どうやって戦ってるんデスか？」
「お前らが見たら驚くぞ？大道芸みてーな戦い方してんだよ、この２人はな」
「…クリスが知っている以上隠す必要もないな。この『護業』という一刀と２丁と２本の脇差しを使っている」
「後は陰陽術やら占術・符術やらなんやらも使っとる…っちゅうワケじゃ。ドゥーユーアンダスタンンンンドゥ！」
「喧しい。…こっちも疑問に思っていたが、奏者…と風鳴司令は言っていたな…君たちはどうやって戦うんだ？」
「私達は、歌を歌って戦っている」
「なに？歌って戦う…？…まさかな」
「さしずめ銀河の果てまで歌ってリポートでもするんとちゃうか」
「んなわけねぇだろ！思考回路までロケットでぶっ飛んだか!?」
「…前例があるから割と本気にしているぞ、コイツは」
「アップ！ダウン！アップ！ダウン！ぽーう！ぽーう！ぽーう！って

のう！」
「しゃ、小牟さん！それはなんか色々マズいデス！」
ったく…もうすぐ現地に着くってのに緊張感の欠片もねぇメンツだ…
…そう思ってるのはあたしだけじゃないだけマシか。零児の奴も渋い顔してやがる…
「全く…そろそろ渋谷に…ッ！」
「零児さん？どうしたんですか？」
いきなり頭を押さえる零児。…おいおい、マジかよ…このパターンだとアイツも来てるんじゃねぇか…
「頭のその古傷…？大丈夫デスか!?」
「…切歌よ、安心せい。…零児は大丈夫じゃ、問題はないんじゃ」
「そう…俺には問題はない…出てこい、沙夜ッ！」
零児がそう言うと突然空間が歪み、その歪みから一つの影が見えた。やっぱりアイツか…
「出てこいと言われれば…出て行きたく無くなっちゃうのがサガよね…ま、出てきちゃうんだけれど」
白い髪にジャケットと言って良いのか怪しいくらいに露出度の高い黒いジャケットにホットパンツの女…沙夜が姿を表した。
…なんか、こうして改めて見るとコイツ、すげぇ格好してやがんな…
「久し振りね、坊やと…おチビちゃん。…あれま、そのコ達は…娘さんかしら？」
「ハーフではない限りそんなもんあり得るわけなかろうが！っちゅうか、わし等の子供でも無いわ！」
「…すぐには否定しないことには追求しないぞ」
「…どう見ても親子にも見えないよ、私達」
「あの着眼点…タダモノではないデース…！」
「あぁ、タダモンじゃねぇよ、アイツは…アイツもまた、人間じゃねぇからな」
コイツもまた狐の妖怪であるが…

小牟と違うとすれば、あっちが中国の仙狐、こっちが…日本の妖狐、っつー分類になる。まぁ大まかには一緒って思ってるけどな。
「あん、乙女の秘密を知ってるなんて…貴女何者？どこの組織？言ってくれるかしら？」
つい先程似たようなことを聞かれた気がするぞ…やっぱ狐同士気が合うんじゃねぇか？お前ら…
「…ちっ、相も変わらず駄狐か、おい！今度はなにを企んでる！」
「企んでいる…そうね、確かに企んでいるわ。…元の世界に帰る方法を、ね」
「なに…？…言われてみれば、あいつ等が居ないな」
「アイツ等…ってぇーと、あの赤い馬に青い牛か」
毒馬頭、毒牛頭…沙夜が居るなら必ずコイツ等も居る、側近の奴らが居ない…か。
「どうせロクでもないことをまた企んでおるじゃろう、お主は」
「冷たいこと言わないの。これでも今回はちょっぴり焦ってるんだから」
「…3人は、知り合いだったりするデスか？」
「ただの…宿敵さ」
「…！」
「…だが、元の世界に帰る方法なら俺達も探しているところだ、一体何を考えている？」
「利害の一致、と言う点に関しては確かに坊や達とは行動したいところだけれど…」
すると、どこからともなく…〝アイツ等〟が出てきやがった。
「この子達、どういう訳か邪魔してくるの。…手伝ってくれたら、教えてあげてもいいわ」
「…調、あれって…！」
「嘘…ノイズ…!?」
「…本当に、ソロモンの杖が地獄の底から這い上がってきやがったってのか…!?」
「…！貴女達、知っているの？」

なんだ？コイツ…ノイズの事を知らない？どういうこった…？
「少なくとも、俺達よりかは知っているだろうな」
「っちゅうか、あのカンジ…前にも似たようなヤツがおったぞ」
「…グノーシス、ね。…それが本当なら、私達、おしまいね。…触れたら炭になっちゃうみたいよ？」
「…ちっ、なら…向こうから来る前に仕掛けるッ！」
そう言うと零児が前に出る…おい、ちょっと待て！
「おい！生身の人間が突っ込んでいくんじゃねぇ！」
「…金（ゴールド）ッ！」
零児が後ろのホルスターから金色の銃を引き抜き、銃爪を引いた…
「…一応フォローはしようかのう、銀（シルバー）じゃッ！」
続いて小牟が銀色の銃で追撃したが…やっぱり効いてねえな、アイツ等には…
「…ちっ、やはり駄目か」
「弾丸をケチるでない！…と言いたいところじゃが…わしのも見事に効いとらんの…」
「私も出会う前に撃ってみたんだけれど、やっぱりこの子達には効かないみたいね」
「そういうことは先に言わんか！この弾、高かったんじゃぞ！」
「下がって、零児さん！小牟さん！…切ちゃん！先輩！」
「合点承知デスッ！」
「仕方ねえ…行くぞッ！」
「これ、待たんか！ぬし等は一体何を…」
「Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ…」
「Ｚｅｉｏｓ　ｉｇａｌｉｍａ　ｒａｉｚｅｎ　ｔｒｏｎ…」
「Ｖａｒｉｏｕｓ　ｓｈｕｌ　ｓｈａｇａｎａ　ｔｒｏｎ…」
あたし達は聖詠を唄い、ギアを纏った。…それにしてもよ、沙夜の前で纏っても大丈夫か…？
って、すっげぇ興味深そうにこっちを見てやがる…
「…！、貴女…いいモノ持ってるじゃない、お名前聞いても良いかしら？」

はぁ!?なんであたしなんだ?しかもピンポイントで…
「戦場で何のんきなこと言ってやがる!…あたしは雪音クリス、昇天率１００％のヒットガールだッ!」
【ＢＩＬＬＩＯＮ　ＭＡＩＤＥＮ】
ノイズに向かってガトリングを一斉掃射し、アイツ等を炭に変えた…つい名乗っちまったよ…
「あらま、意外とノリノリ?」
「クリスよ、あまり乗せられるでないぞ…」
「まだ来るデスよッ!切りまくるＤＥＴＨ!」
【災輪・ＴぃＮ渦ぁＢェル】
「…この新しい武器があれば、百人力だよ」
【β式・超電磁斬】
「レッツ、シラベイン」
アイツ等も続く…っておい、そこのピンクの方、なんかヤバい技使ってねえか?
「歌って戦うと聞いておったが、まるで大道芸じゃの…わしの歌を聞けーい!」
「うふふ、まるでアイドルみたいね、あのコ達。…うちにスカウトしちゃいたいくらいよ」
「そこの駄狐共。炭にされてみるか?」
「あーもう!下がってろってお前らッ!」
「その必要はありません」
突然、機械的な声が聞こえた…なんだ?新手か!?
「はぁ…はぁ…こ、ＫＯＳ(コス)―Ｍ(モ)ＯＳ(ス)ちゃん、いきなり走ってどうしたの…ってうえぇっ!?クリスちゃん!?それに調ちゃん、切歌ちゃんに…ノイズッ!?」
「申し訳ありません、ヒビキ。この場所に私の友の反応があったので駆けつけました…お久しぶりです、レイジ、シャオムゥ。そして…サヤ」
おいおい冗談だろ…ＫＯＳ―ＭＯＳまでこっちの世界に来てやがったのか…そして何故かあのバカ(立花響)とセットで居やがる。

しかもあの躯体…マジかよ、Ｖｅｒ．４じゃねぇか!?歩くエルデカイザーなんてあたし達の世界に来て良いもんじゃねえぞ!?
「さっき振りじゃろ、このツッコミロボ！変に冗談を言うでないわ！」
「…どうやら、俺達と同じようにゆらぎに巻き込まれたクチだな、ＫＯＳ―ＭＯＳ」
「そして、だ…おいバカ、お前一体どこで油売ってやがった!?なんでソイツと一緒に居やがんだ?」
「あ、あはは…とりあえず、話は後だよクリスちゃん…来るよッ！」
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ…」
バカがギアを纏い、戦闘態勢に入る。…ちっ、まだ出てくるってのか?
ここまで来りゃほぼクロだ…誰かが再びあの杖を使ってるはずだ…一体どこに居る?
「次から次へと…キリが無いデース…」
「うん。…後どれくらいで終わるのか調べたいくらい」
「ふむ…して、ＫＯＳ―ＭＯＳよ…お主、あやつ等の分析とか、なんかそういうのはないかの?」
「アバウトが過ぎる。…いけるか?ＫＯＳ―ＭＯＳ」
「お任せください。…ヒルベルトエフェクトであれば、対処は可能です、シャオムゥ、レイジ」
「…そいつは重畳。よろしく頼む」
「了解です。ヒルベルトエフェクト、展開」
ＫＯＳ―ＭＯＳがそう言うと、頭部のバイザーを降ろし…光を周囲に放つ。
コイツがヒルベルトエフェクトってやつか…ホントにノイズに効くのか?
「なんと」
「カラクリィィィィ!?」
「敵性体の空間への固着を確認。解析します…実体化に成功、物理攻撃による対処が可能です」

「じょ、冗談だろ…どういう原理だよソイツぁ…」
「本来であれば、虚数空間に存在しているグノーシスへ実在事象からアプローチするための…」
「いつぞやみたいな説明は後だ！こっちの攻撃が効くなら構わんッ！」
「了解です。これより敵勢力の殲滅を行います」
【Ｇ・ＳＨＯＴ】
　ガトリングでノイズに向けて一斉掃射するＫＯＳ―ＭＯＳ。…重火器の扱いなら、あたしだって負けてられねえなぁ？
「もってけダブルだッ！ガトリングバージョンッ！」
【ＢＩＬＬＩＯＮ　ＭＡＩＤＥＮ】
「あん、これだけ弾丸が飛び交ってると…私達の出番、無くなっちゃうわね」
「何莫迦な事を言ってる。子供ばかりに戦わせちゃ、こっちのメンツが保たん」
「それじゃ、いっちょそこらじゅうで派手にやっちゃるかの！」
「…行くぞッ！その位置だッ！」
「まかせんしゃ～い！銃の型で決まりじゃッ！」
「呼ばれて飛び出て…ってね？」
【二丁・銃の型・巴】
　零児達が銃の乱射でノイズ達をどんどん蹴散らしていく…スゲェなアレ、サーカスで入場料取れるレベルだぞ…
「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つッ！…必滅の理なり…！」
「す、凄い人達だね…クリスちゃん…こっちも負けてられないよ！とりゃぁぁぁッ！」
【我流・餓狼裂波】
「乙女なら、拳一つで勝負せよッ！…なんてね？」
「生身で受けたら、炭になるけどな…」
　お前さては最近ボンボン版の餓狼伝説読んだな？なんてチョイスしてやがんだ…
　…ちっ、後どれくらいだ？結構倒してるはずなんだがよ…

「ＫＯＳ―ＭＯＳ！あとどんぐらい倒しゃ良い！でねーとキリがねぇぞ！」
「残存敵勢力は残りわずかです、クリスチャン」
「キリスト教徒じゃねえよ!?あたしの名前は…雪音クリスだぁぁぁッ！」
【ＢＩＬＬＩＯＮ　ＤＥＴＨ　ＰＡＲＴＹ】
　ガトリングとミサイルの一斉掃射で残りのノイズ共をぶっ飛ばしていく。これでなんとか片が付いたみてーだな…
「敵勢力、殲滅を確認。これ以上の増援は確認されません」
「ふぅ…なんとか終わったみたいだね…」
「あぁ…ところで、君もクリス達の仲間のようだが…」
「あっ、はい！私、立花響、１７歳ですッ！誕生日は９月１３日で、身長は…」
「おいバカ、そういう事故紹介は後にしやがれ！…ＫＯＳ―ＭＯＳ、他に異常とかねーか？」
「周囲には微弱ながら空間の歪曲、過去の事例から【ゆらぎ】と予測されますが、今のところ異常に至るまでにはなりません」
「ちっ…不安定なのには変わりは無い。…この場所なら、特にな」
「…そうね、ココなら…何が起きても不思議では無いものね」
「不思議っちゅう点では…お主、何故ココに来おった？手伝ってやったから教えんか！」
「少なくとも、この場所で話してるとまたあの子達がやってくるかもね」
「…立ち話は危険、一度戻ったほうが良いと思う」
「そうデス！また戦うってなったら…流石にお腹がヘリンコファイヤーデス…」
　…お前らなぁ…つっても、疲れてんのは確かだ、ココでおちおちお話してられねぇのも事実か…
「わーったよ…一度本部へ戻るぞ」
「クリス…！良いのか？ＫＯＳ―ＭＯＳはともかく…沙夜を本部まで連れて行く気か？」

「あん、坊や…か弱い女をこんな危険な場所に一人にするつもり？…い・け・ず」
「女の扱いが相変わらず分かっとらんからのぉ、こやつは…女泣かせのエージェントじゃぜ」
「駄狐共…纏めてお仕置きだ」
「か弱い女ならあんなに銃ぶっ放してるかよ…どの道、放っておく訳にはいかねえんだ、問題が起きたなら…そん時はそん時だ」
　それに…杖の事もある。あたし達の世界でゆらぎが起きたのと何か関係してるはずだからな。
「では、私達も『本部』に同行する、と言うことで宜しいでしょうか？クリス、レイジ」
「あぁ…情報を一度整理してみねぇとな」
「そういうわけだ…沙夜、何かあったら…悪・即・斬だ」
「んもう、坊やったらお熱いコト…大丈夫よ、今回は何もしないから…ね？」
「…ココまで言うたら、こやつも中々頑固じゃからの…わし等で監視してれば事も起きんか」
　まぁ、この２人が沙夜を見てくれるってんならある程度は安心できる。
　…とりあえず、おっさんにはなんて報告すっかな…
　このバカの事も言わねぇといけねぇから後で聞いとかねぇと…
「…クリスちゃん？どうしたの？私の顔に何か付いてる？」
「特に異常は見受けられませんが。…クリス、どうかしましたか？」
「お前らなんで妙に仲良いんだよッ!?」
　頭痛くなってきたぜ…全くよ…

　つづくッ…？

風鳴る独奏は完成へ

～前回のあらすじ～
鞘と言えば刀…つまり剣だッ！
雪音達は叔父様の指示により渋谷に向かうと、
沙夜と名乗る女性が現れた。
どうやら零児さん達と同様に私達の世界に来たらしい。
…いかにも怪しげな雰囲気を纏っているが…
その後に現れたノイズを倒している途中、
からくりのＫＯＳ―ＭＯＳと共に現れた立花等と合流し、
一度本部に戻る事になった…
じゅ、銃を使うのも…悪くは無いか…？
今度雪音に教わってみるとしよう…

Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部、ブリーフィングルーム――――

あたし達は渋谷から戻ってきた。
…途中、バカからＫＯＳ―ＭＯＳと何故一緒に居たのか経緯は聞いたが…報告するのがアホらしいくらいの事だったんだよ…
どうやら零児達が来るより少し前ぐらいにあたし達の世界に来たらしい。
まぁ詳しい話は良いか。…で、今はと言うと。
「…なんかまた増えとるぞ、零児…それもついさっきまで見覚えがあるの」
「全く…またＫＯＳ―ＭＯＳを追ってきたとでも言うのか？」
「貴女もこの世界に流れ着いていたみたいですね、Ｔ―ｅｌｏｓ」
「ＫＯＳ―ＭＯＳッ！どこをほっつき歩いていると思ったら…こんなところに居たのかい…」
「あん、テロテロ、また会ったわね。…これも何かの縁かしら、ね？」

「沙夜…また貴様か、これで何度目だ？いい加減飽きるぞ」
「まさかすぐに日本に戻るなんてね…お客様もセットでね」
「とんだ蜻蛉返りに遭ったな…雪音、一体何があったのだ？」
…なんかさらに増えている。…っておい…
「ちょっと待てマリア…今セットで帰ってきたって言わなかったか？」
「え、えぇ…私と翼と…このＴ―ｅｌｏｓと。３人で…」
「待て、待て！待ってくれ!?もう意味が分かんねえよ!?」
「厳密には、日本に戻ってきた時に遭遇した…だ。どうやら彼女は異世界のからくりらしい」
「そこの小娘が気になる名前を言っていたから付いていく事にしただけだ。
…最も、お前に会えるとは思っていなかったがな…ＫＯＳ―ＭＯＳ！」
「だから、Ｔ―ｅｌｏｓ！人違いだって言っているじゃない!?」
「少なくとも私達が居た世界に関連する人物ではありません、Ｔ―ｅｌｏｓ」
「フン、冗談が通じないヤツはこれだから嫌いだよ」
…先輩が？…ってあぁ…マリアか…マリアね…
確かに名前は一緒だけどな…
それで偶然ＫＯＳ―ＭＯＳと出会うなんざ最早仕組まれてるんじゃねぇか？
つーかお前…冗談が言えるのかよ…
「皆、集まってもらってすまない。俺がこの子達を指揮しているＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．の司令官、風鳴弦十郎だ」
おっさんが来て、異世界から来た奴等に向かって言う。
…相も変わらずこういうところで律儀だな。
「あん、素敵なおじ様だこと。…私は沙夜、今はあなた達の味方よ、うふふ」
「私は対グノーシス用人型掃討兵器ＫＰＸ　シリアルＮｏ．００００００００１…通称ＫＯＳ―ＭＯＳと呼称されています。そして彼女

は」
「…Ｔ―ｅｌｏｓ、それが私の名前だ…馴れ合うつもりは無いよ」
「こら、Ｔ―ｅｌｏｓ！貴女さっき私達に協力するって言ってたじゃない！」
「チッ、この世界から抜け出す為だ、勘違いするな…」
「み、見事なまでのツンデレデス…」
「いや、あやつの場合はツン殺じゃ、切歌…」
それにしてもマリアに対して何故か甘いな、Ｔ―ｅｌｏｓのヤツ…やっぱり名前が一緒だから無意識でそうなってるのか？
大人しいならそれで良いか…本部で暴れられちゃやべーんだよコイツとＫＯＳ―ＭＯＳは…
相転移砲なんざココでぶっ放してみろ、一発でまとめてお陀仏、仏様に会いに行く羽目になるぞ…

―――――

あたしと零児は一通りの出来事をおっさんに報告した。
一応あのバカのことについてもついでに言っておいた。そしたら
「相変わらず響君らしいと言えば響君らしいが…次のメニュー、少し追加しておくか？うぅむ…」
と、大変微妙な顔をしてやがる…まぁ、あのバカだもんな…考えても仕方ねぇぞ、おっさん…

その間に、どうやら他のメンツも軽い顔合わせぐらいは済ませていたようだ。
この異世界組共、順応するの早すぎねぇか…!?いや、ウチの方も大概だな…
「２人共…色は違えど…姿はそっくりだね」
「Ｔ―ｅｌｏｓさんもＫＯＳ―ＭＯＳさんみたいなトンデモ兵器出せ

るデスか？」
「ふん。懐くんじゃないよ、小娘共が…ヤツより優れているに決まっている！」
「Ｔ―ｅｌｏｓの好感度が上昇したようです」
「…って好感度なんかあるんか!?ギャルゲーとちゃうじゃろ!?」
「ぎゃるげー…？とは何だ？知っているか、マリア？」
「え、ええっ!?ししし、知らないわ、そんな伝説の樹の下で告白すると結ばれることなんか！」
「あん、その話題…私達がすると何かイロイロと問題があるから、あえて触れない事にするわね」
「…？何か問題でもあるのか？沙夜」
「そうね…強いて言うなれば、クロスしてないもの、ね」
「おい待て沙夜、その話題は止せ。…本題に入るぞ」
　良いツッコミだ零児。沙夜には６点をくれてやる。
　そろそろ本題に入んねーと話が進まねえんだよ…
「…はいはい、女を急かす男は嫌われるわよ、坊や」
「そこに関しては同感じゃ。いい加減女心っちゅうもんを知らんとな…」
「まとめてうるさい。…聞かせてもらうぞ、何故ここに来た？」
「あん、相変わらず熱いんだから…そうね、ここに来たのは偶然よ…何かに呼ばれたかのように、ね」
「何かに…？また訳のわからないことを」
「…ま、『あの剣』なら出来ない事も無いのだけれど。…どうも違うみたいなのよ、ね」
「あの剣…？『ソウルエッジ』の事か!?それと同じような事が起きたと言うのかお主は!?」
「…沙夜、その『そうるえっじ』とやらは一体何なのかは知らないが…今回の件、そして『ソロモンの杖』と一体どう関係しているというのだ？」
　先輩がふとそんなことを言うもんだから、そういやなんでなんだ？って考えた瞬間…

ちょっと嫌な想像をしてしまう。
まさかな…いや、流石にそんな偶然なんてありえねぇだろ…？
「そうね…ま、一度止められちゃったお話だし…軽くおさらいでもしておきましょ」
「元々、ソウルエッジは…魂喰らいの邪剣と呼ばれる曰く付きの代物でな。封印されとったが…」
「それを、ある戦いで封印が解かれ、俺達はその剣に振り回されていた。
…世界を飛ばされるくらいにはな」
「そして、その戦いを最後に姿を見ることはなかった、ってワケ、ね」
「姿を見ることを…って、どういう意味ですか？言ってること、全然わかりませんッ！」
「確かに…振り回されるって事は…剣じゃなく人だった…とかかしら？」
「いや…ソイツはな、次元を絶つ剣って言われるほど強力なモンなんだよ…」
「…もしかして、剣が色んな世界をビュンビュン飛び回っていた、って事デスか？」
「大当たり。…で、封印されていた場所が問題なの。…『時の狭間』って言うんだけれど」
「ときのはざま…って？」
「『トキノハザマ』…次元空間の事を指すものです、シラベ」
…ビンゴかよ。こりゃかなり厄介事になってきたぞ…？
「もしかしてよ、『時の狭間』に『ソロモンの杖』が入り込んでいた…なんて言うんじゃねぇだろうな？」
「可能性としてはあるわね。最も、私は『ソロモンの杖』が何なのかはさっぱりだけれど…
物凄いエネルギーに引き寄せられた、とでも言っておきましょうか」
…ネフィリムをバビロニアの宝物庫に閉じ込めた時に何かの拍子で時の狭間に行ったって言うなら都合がつきやがる。

それに、現に今ノイズが出てきてるんだ。ありえねぇ話じゃなくなってきやがったな…
「おい沙夜。…それなら一つ聞きたいことがある。何故ノイズが現れた時、渋谷に居た？」
「私達にとってはあの場所は特別。何かに引き寄せられて、ゆらぎ経由であの街に居たわけ。…それに、坊や達が来てることも、何となく感じたから、ね」
「つまり…女の勘、なんですねッ!?大人の女性って凄いなぁ～…」
「お、女の勘で片付けていいんデスか…」
「何かに、な…しかし気になるのがあの『ソロモンの杖』を一体誰が使役しているか、と言う所なのだが…」
「あぁ。…最も、使いそうなのが約二名程、それもどっちも時の狭間から出てきてもおかしくないようなヤツだけどな…」
「フィーネと…Ｄｒ．ウェル…前者はともかく、後者なら最悪ね…ロクなことが起きないわ…」
「大丈夫デスよマリア。もし出てきたらマリアの目を汚さないように一瞬で私達でカタを付けるデス」
「そうだよマリア。廃棄物は廃棄物らしく処理しないと」
ウェル博士の可能性が出てきた途端元Ｆ．Ｉ．Ｓ．組の目からハイライトが消えやがった。どんだけ嫌なんだよ…
「ウェル博士だったら、かぁ…どうせまた英雄ダーとか愛ダーとか言いながら嫌がらせしてくるんだろうな…」
「はっ、科学者ってのはどこの世界もイカれたヤツばかりかい」
「私達が知り得る科学者が特殊な存在かと思われます、Ｔ―ｅｌｏｓ」
バカの言う通り、もしヤツなら例の英雄病を拗らせてあの手この手で嫌がらせの手を練ってくるはずだ。
だが…もしヤツじゃなく…
「もし、フィーネだった場合…何故このような雲をつかむ様な形でこちらへノイズを仕掛けたのだ…？」
そうだ。もしフィーネならわざわざあたし達に気付かれるようなやり方をしないはずだ。

「…今は情報が足りない状況だ、一刻も早くソロモンの杖を奪還するために、色々と探っては居るんだが…分かり次第報告しよう。
　すまないがしばらくの間皆は待機していてくれ」
「弦十郎さんの言う通りだ、情報が無い以上は無闇に動くのは危険だな」
「そうじゃのう…ところで、フィーネやらＤｒ．ウェルとやらは一体ナニモンじゃ？外人？歌？」
「訳が分からん上に笑う坪…ツボはどこだ」
「まぁそんなもんだよな…そういや言ってなかったな…さて、どっから話すかね…」
　待機している間、何もしてねーで居るってのも眠くなるしな…ちょっとした昔話でもするか。

続くッ…？